

「ネイチャーポジティブな川づくりに魂を入れたい」

代表理事 塚原 浩一

「環境も河川法の目的のひとつ」「すべての川づくりは多自然」など、川づくりはもともと「ネイチャーポジティブ」なはずだが、実態はなかなかそうでもなかったのかなと思う。そこをどう組み立てなおせば良いのか。

治水は河川管理者の「責務」でありゴールも明確、一方で環境も「責務」のはずだが、今はゴールがわからなくて「責務」になりきれない何かでしかない。「ポジティブ」という言葉は目指す方向性は示していると思うが、ゴールがわからないと動けない。だから言葉が踊るだけでは、以前と同じように物事が思うように進まないことになってしまう。河川の自然環境とどう向き合うのが改めて問われている。

川づくりの「ネイチャーポジティブ」にどうしたら魂を入れられるか。

まずはマインド、志の問題が大事だと思う。

河川管理者をはじめ河川に関わる人たちが自然環境をリスペクトし、こよなく愛する気持ちを持つことが何よりも大切。その気持ちを具体的な行動につなげることができてはじめて「ポジティブ」が具体的に動く。河川に関わる人たちは皆根っここのところではそういうマインドを持っているはずだと思うが、防災対策への責任感が強くてそれが表に出てこない面があるのではないか。だから、治水対策をやる時に「自然環境にとってこれでいいのか？」という疑念や躊躇が作動しにくいのかもかもしれない。

少しでも「これでいいのか？」と思って、それが次のアクションにつながれば必ず良い方向に行くはず。自然をリスペクトし、治水対策として「どうしたらもっと環境が良くなるのか、悪くならなくて済むのか、もっと自然に優しくできないのか」を常に問いかけ追求する。そうすれば自ずと環境に関する技術資料を改めて紐解き勉強したり、専門家の意見を聴き直したり、具体的な動きになって表れてくるはず。そこがまず「ネイチャーポジティブ」の入り口ではないか。

そのためにも多くの河川にかかわる人たちが、良い川、良い水辺、良い自然環境に触れて、また既に「ネイチャーポジティブ」に活動している人たちと交流する機会を増やしていくことが本当に大切。「ネイチャーポジティブ」がそういうところから世の中に増殖していくって欲しいと思う。

そして「ポジティブ」でいくためにどうしても必要なのは環境の目標、具体的にどうすべきか目指すゴールを示すこと。それを実現していくための技術・手法を提供すること。ここが欠けていると「ポジティブ」になりたくてもなれない。せっかくやろうと思っても挫折したり、やっても間違ったりチグハグになったり。どこまで何をやったら良いのか分からない、だからで

きないしやらない。そういう悪循環になる。

求めるのは治水だけ、環境だけの最適解ではなくて、治水と環境と両方を一体的にしっかり考えて総合的な解決策を見つけること。そのためには、治水とあわせて考えることのできる環境の具体的な目標を用意するとともに、課題解決に取り組むための治水・環境一体の計画・設計・施工・管理の実践的な手法とツールを提供すること。

そのための様々な研究も進んでいる。環境・生態系を定量的に評価し計画に反映する手法、河道改変に対する応答を治水・環境両面から予測する手法、またそれらをサポートする三次元設計、データ統合などのデジタル技術、環境調査・モニタリング技術など。「ポジティブ」にいける条件は整いつつあると思う。

川づくりとしてのアプローチや考え方ももっと柔軟になっていっても良いのではないか。

気候変動対策、緊急治水プロジェクトなどで進められる河道掘削などの大規模な河道改変は環境の危機と見られがちだが工夫次第では環境もよくできるチャンスでもある。どうしてもオンサイトで環境を保全できないのであればオフサイトでできることで補完することがあっても良い。すぐには治水と環境を両立できないのであれば、まず治水を先行してあとから自然再生をフォローするようなやり方もあり得る。生態系クレジットなどを制度化すれば民間にももっと貢献してもらいやすくなる。評価の仕方も、治水でこうとか環境でこうとかだけではなくて、地域のウェルビーイングの観点でこう、といった別の視点での総合的な評価軸も必要かもしれない。

そういう多様なアプローチを取り入れていけたら良いと思う。

流域治水を進めるためにも環境意識が重要だと思う。治水だけではなくなかなか「自分ごと化」できない流域のプレーヤーには、むしろ環境やまちづくりでの活動を介して流域治水に貢献してもらえないのではないか。自然の恵み、営力、脅威をリスペクトした地域の伝統知こそ「ネイチャーポジティブ」であり、そこに流域治水のヒントがたくさんあると思う。

川づくりが目指すネイチャーポジティブは、治水と河川環境・生態系がWIN-WINになり、治水の安全と自然環境の豊かさと恵みが相まって地域の活力のエンジンとなること。そのような社会を目指すには課題はまだまだあるが、なにはともあれ実践が大事であり、立ち止まっているのがいっばん良くない。できることから、身近なことからでもやっていこうという姿勢がまさに「ポジティブ」に込められたメッセージであると思う。